

聖徳太子『勝鬘經義疏』

現代語訳と研究の抄録——「撰受正法章」(三)

——聖徳太子讚仰研究会『勝鬘經義疏』研究記録(抄)その九として——

夜久正雄
梶村昇

太子義疏訓点文(『昭和会本』)——經典・撰受正法章のうち、「人の能出成を明す」の分類ならびに、その第一の「重担の比」の分類・語釈

從^リ又^リ如^リ大地^ニ以下。明^ス出生^ヲ中^ノ第二^ニ明^ス人^ノ能^レ出^ル成^ヲ。就^テ中^ニ亦^リ有^リ二^ニ比^一。自^ラ為^スレ^ト。

第一^ノ名^ニ重^ク担^ク比^ト。明^マ八^ノ地^{以上}大^ノ士^ノ荷^ク負^ク衆^ノ生^ノ之^ノ義^ト。

第二^ノ名^ニ宝^ノ藏^ノ比^ト。明^マ八^ノ地^{以上}大^ノ士^ノ為^ク衆^ノ生^ノ之^ノ義^ト。

就^テ第一^ノ重^ク担^ク比^ト即^チ開^ト合^ト為^レ二^ニ。

就^テ開^ト比^ト即^チ有^レ二^ニ。

第一^ノ初^ニ二^ノ句^ハ為^シ八^ノ地^{以上}能^ク負^ク人^ノ作^ル比^ト。

第二從_二何等為_四以下。為_三所負法_二作_レ比。

有四句。一大海比。菩薩言。広抱_二衆生_一。即如_二大海抱納無窮_一。故以為_レ比。

二諸山比。緣覺乘言。真高出。亦如_二衆山之高_一。故以為_レ喻。

三草木比。聲聞乘言。其頭數繁多。如_二草木_一。故以為_レ比。

四衆生共比。人天乘。人天乘但在_二生死中_一。如_二衆生_一。勉勉受_レ生。故以為_レ況。

第二合比分為_三。

第一正合。

第二結合。

第三讚歎能負人。

就_テ第一正合中_ニ亦有_レ二。

第一合_ニ能負人_一比。

第二合_ニ所負法_一比。

踰彼大地者。地唯負_レ形。不_レ如下_二大士兼負_レ形_一。神_レ教令_中改_レ惡修_レ善。故云_レ踰_二彼大地_一。

第二合_ニ所負法_一比。唯倒合。先合_二衆生_一比_一可_レ見。從_二聲聞_一以下合_ニ上草木_一比。從_二緣覺_一以下合_ニ上諸山_一比。從_二大乘_一以下合_ニ上大海_一比。言_二八地以上大士能負_レ五乘_一衆生_一。則義同_二大地_一。負_ニ此四種_一也。

第二結合_レ見。

從_二世尊_一以下。合_中第三讚_ニ歎能負人_一。友_ハ是_レ相救_レ為_レ義。然_{ルニ}請_レ而_レ後_レ救_レ非_ニ真友_一。故云_ニ作不請之友_一。菩薩化_レ

物如^{ツシム}慈母^ニ就^{シテ}嬰兒^ニ。故云^ニ為^ス世法^ノ母^ト。

右の『義疏』の現代語訳

經典原文の又大地の（四重担を持するが）如しより以下の所は、撰受正法がもろもろのものを生み出すことを説き明すうちの第二の箇所、正法を撰受する人が能く万行を生み出すこと（出成）を説いてゐる。この箇所に二つの譬が出されてゐる。従つてこの内容は二つに分けられる。

その第一は、重い荷物を担ふ意味合ひの「重担の比」と名づけられる。それは八地以上の境地にある大士（菩薩）が、人といふ人ごとごとくを荷つてゆくことを説明してゐる。

その第二は、教の宝の蔵といふ意味合ひの「宝蔵の比」と名づけられる。それは八地以上の境地にある菩薩が人といふ人ごとごとくのために、教の宝を用意して持つてゐることを説明してゐる。

今述べた第一番目の重担の比喩は、「開譬」（開譬と同じで、譬を提示すること）と「合比」（合譬と同じで、譬の意味する中身を示すこと）とに分けられる。

その開比を二つに分ける。

まづ開比のうちの第一は、初の二句が八地以上の境地にある「能負の人」（よく重い荷をその身に荷ふことのできる大士）についてなされた比喩であり、

その第二は何等をか四と為すより以下が、能負の人がその身に荷ふ重き荷、つまり法そのもの（所負の法）についてなされた比喩である。

これ（所負しよふの法）について四つの句がある。

第一の句は大海であり、菩薩に比してゐる。その意味は、菩薩が広く人といふ人ことごとくをその胸に抱いて救ひとり下さることが、恰あたかも大海があらゆるものを差別なく抱きかかへて極きはまりない姿と同じやうであるので比喩ひゆとしたものである。

第二の句は諸山であり、縁覚えんがくに比してゐる。その意味は、縁覚が自分ひとり悟つて、迷つてゐる衆生の中にくつきりと抜きんでて傑出けつしゅつしてゐる様は、恰あたかも高い山々が他の山々より遙かに高く抜きんでてゐるのに似てゐる。それで比喩としたのである。

第三の句は草木であり、声聞しやうもんに比してゐる。その意味は、声聞は仏の教を直接聞くことによつて悟らうとするものであるから、仏のまはりに多数集つてゐる種々雑多であり、その様は丁度草木が沢山生ひ繁つてゐるのに似てゐるので、比喩としたのである。

第四の句は衆生しゆじやうであり、人天にんてんに比してゐる。人間（人乗）やインドの諸天（天乗）がこの迷ひの世界から出ることができないのであることは、衆生がその持つてゐる迷ひが因もとで、種々の生を送らざるを得なくて、六道ろくどうの世界をあちこち流転るてんする姿に似てゐる。そこで比況ひきやうしたのである。

次に重担じゆうたんの比の中の第二番目の譬の中身を示す「合比」について、その中を三つに分ける。

その第一は提示された比喩に対して、その比喩の中身を対応させる。

その第二はその比喩と、その中身とが結びつくことを述べる。

その第三は能負のうふの人を賞め讃へる。

そこで右の第一に挙げた「正合」の中で、また二つに分れる。

その「正合」の中の第一は、重き荷を荷ふ「能負の人」についての比喩とその中身との対応を述べ、その第二は担はれる重き法（「所負の法」）の比喩に対してその中身を一つ一つ挙げて示してある。

さて、この「正合」の中の第一のところ、彼の大地に踰えたりとあるのは、大地は形ある物質を担ふだけであるが、八地以上の境地にある大士は、物質と精神との二つをあはせ担ひ、人といふ人ことごとくを教へて、その悪を改めさせ、善を修めさすので、このやうな能負の人の働きは、大地の働きよりもはるかに立ち勝つてあることを言ふのである。それで彼の大地に踰えたりといふのである。

「正合」の中の第二は「所負の法」についての比喩の中身を述べてある。ただこの場合の合比に挙げる四つの譬の挙げ方の順序が逆になつてゐる。即ち、第一に挙げるべき衆生についての譬は合比の一番終り、つまり第四の句に示されてゐる。これについては經典本文を見るがよい。

仏の教を直接聞くことを悟りの機縁とする声聞以下の人々については、前の第三の比喩に挙げた「草木の比」を挙げて示し、独り悟るをよしとしてゐる縁覚以下の人々については「諸山の比」を挙げて示し、大乘より以下の人々については一番初にある「大海の比」を挙げてさし示してゐる。これら四種の合比が全体として意味するところは、八地以上の境地にある大士が五乘（人・天・声聞・縁覚・菩薩の五乘）といふ五種類の修行段階に分けられる人といふ人ことごとくをよく担ふことができ、その意味は、あたかも大地がその上に大海、諸山、草木、衆生の四つのものを担ふのと似てゐるといふことである。

經典本文の終りの世尊より以下のところは、初に合比の中を三つに分けたその第三の箇所であつて、四種の重

き荷を担ふ「能負の人」(即ち八地以上の境地にある大士)を賞め讃へる。この中で「友」とあるが、そもそも友はお互ひに相助けあふのが本来の意義である。しかし助けを相手に求められて、その後になつて救ひの手をさしのべるといふのでは真の友とは云へない。だから不請の友と作すと云ふのである。「相手から助けを求められなくとも」といふ意味であり、さうした状況でも自発的に相手を救ふこそ真の友である、といふ意味から「不請の友」と言はれたのである。また菩薩が人といふ人ことごとくを教化し救ふのは、あたかも慈愛深い母が自分の赤子を常に見守る姿のやうである。それでこの世のあらゆるものにとつて慈愛深い母であるといふ意味合ひで世の法母となるといふのである。

(研究)

ここは第一に正法を撰受する八地以上の菩薩段階にある大士が、いかに偉大なる力を持つてゐるかを説明してゐる所です。具体的には、大士が人間を初めとして生きとし生けるものすべてを救ひとる重い責任を果し得る力をもつものとして把らへられてをり、その力は、大地があらゆるものを荷負してゐる力よりもはるかに立ち勝るものであるといつた比喩的な説明で完結してゐる箇所であります。第二には、いはばその身に担ふ重い荷物にあたるものが「所負の法」そのものであつて、その一つ一つが何であるかが説明され、それぞれに大海、諸山、草木、衆生の四種の比喩が合致させられてゐるといふ説明の箇所なのであります。

かうした文意の中で、聖徳太子の御解釈として注目すべき点が二つ挙げられるやうに思ひます。それは衆生を重視するといふことと、不請の友を重視するといふ二点であります。

第一の点は、「所負の法」の内容として四つのものを挙げられたその解説の中に見えてをります。それによりまずと、およそ衆生なるものは、本来そのもつてある迷ひ（生死）のために、六道を流転してその生の姿を変へ、処々に流転するものでありまして、その姿は人天乗が依然として迷妄の世界に低迷してゐるのと似てをります。そこで、人天乗には衆生といふ比喩が出されたとあるのです。かういふ解説を太子はなさつてをられますが、その解説は『敦煌本』と全く同じでありますから、『敦煌本』をそのままおとりあげになつたと見て間違ひないでせう。

「所負の法」の比喩として、人天乗に衆生が挙げられるのは四番目ですが、一番目には「大海」が菩薩の比喩として挙げられてをります。ところが『敦煌本』には「大海を菩薩に譬ふ。その抱納无窮なるを取りて況と為すなり」とあり、『勝鬘經宝窟』は「大海最も重し菩薩に喩ふ」としてをります。太子はこの箇所を「言ふところは広く衆生を抱くこと即ち大海の（抱納无窮なるが）如し」と積されてをります。太子の目が常に生きとし生けるものの救ひといふ点に注がれてをられたことを思はせられます。

次の「不請の友」については、『敦煌本』は「真友有るの徳を嘆ず」とあるだけですが、太子は「友は是れ相救ふを義と為す。然るに請ひて而して後に救ふは真の友に非ず」と積してをられます。相手から助けを求められなくとも、自発的に相手を救ふことこそ真の友であることを懇切に積されたものと思はれます。現実の国家国民生活は、同胞の同信協力の結実にあるとの、太子の体験的事実が、この部分の積を「真友有るの徳を歎ず」といふ積だけに止まらずに、敷衍強調せられたものと思はせられました。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・授受正法章のうち、「人の能出成を明す」中の第二の「宝蔵の比」の分

類・語釈

從_レ又如大地有四種寶藏以下。第二寶藏比。明_下八地為_レ衆生_ノ 蘊藏_{トナルノ} 之義_ヲ即開合_{トシテ}為_レ二。

開比中亦有_レ二。

第一正比。

第二結比。

正比中亦有_レ二。

第一初二句為_レ能蘊藏_{トス}作_レ比。可_レ見。

第二為_レ所蘊藏_{トス}法_{トス}作_レ比。有_レ四句。無_レ伽_{トス}比_ニ菩薩乘_{トス}。上_レ伽_{トス}比_ニ緣覺乘_{トス}。中_レ伽_{トス}比_ニ聲聞乘_{トス}。下_レ伽_{トス}比_ニ人天乘_{トス}。

是名四種寶藏_{トス}者。第二結。

就_テ第二合比_{トス}亦有_レ三。

第一正合。

第二讚歎。

第三明_レ即。

正合中亦有_レ二。

第一合_ニ能蘊藏_{トス}比_{トス}。

第二合_ニ所蘊藏_{トス}比_{トス}。

得衆生四種最上_{トハ}大寶_{トス}者。解_{スルニ}有_レ四種_{トス}。

第一解言五乘之善義屬衆生。八地大士備之在心。故言得衆生宝。

第二云。八地以上大士得教化。四種衆生之宝。故云得衆生宝。

第三云。攝受正法由教化。四種衆生而得。故言得衆生宝。

第四解。四種衆生善根竝由八地菩薩為得。故云得衆生宝。

而第一第二解但言本末有異。大意似同。第三第四解但其所得上下各異。故語意皆不同。且第四解於文即便。但此未合所蘊藏。然以後結文為推亦所是也。第三解好即好矣。但其取之甚遠也。第一第二隨念為用。而四種宝中唯無価最上。那得皆是最上一者。以勝兼劣故通称最上。又云。余三始終會成上価。故通称最上。

從何等為四以下。第二合所蘊藏法。

從無聞以下合上下価。從声聞以下合上中価。從緣覺以下合上上価。

從大乘以下合上無価。

從如是以下。合中第二結。

從世尊以下。合中第三明即。

而前重担譬但結而不明。即。今此宝藏譬。即而不結者。前重担譬即言以身為負。於事可難而負。非他身故即義可信。所以結而不明。即也。宝藏譬況言有宝。故即義難明。而非以身負。故於事可易。所以即以不結。且前重担譬。既言踰彼大地。今此宝藏譬。直言得衆生宝。此亦同此意也。

右の『義疏』の現代語訳

又大地の四種の宝蔵あるが如しから以下は、撰受正法の人から五乗の成り出でることを説明する箇所第二で、宝蔵の比（喩）である。八地の菩薩は衆生の悉くのために、教の宝を用意して持つてゐることの意味を説明する。中に開比と合比との二つがある。

開比の中がまた二つになつてゐる。

その第一は比喩の一つ一つを示すもの（「正比」）である。

その第二は全部をあはせての比喩（結比）である。

第一の「正比」の中がまた二つになつてゐる。

その第一に、初の二句すなはち大地に四種の宝蔵あるが如しとあるのは、「能蘊蔵」（宝をつみためて蔵してゐる撰受正法の人の働き）のために比喩を示したのである。經典原文を見ればわかる。

その第二には「所蘊蔵（宝としてつみためられ蔵されるものとしての五乗）の法」のために比喩を作つたのである。これには四句ある。

無価は菩薩のための教（乗）に比し、上価は縁覚のための教に比し、中価は声聞のための教に比し、下価は人・天のための教にたとへたのである。

是を（大地の）四種の宝蔵と名づくことと經典原文にある句は、前述の菩薩・縁覚・声聞・人・天を全部あはせて一括して比喩をたてたのである。

第二の「合比」（比喩の中身を説明すること）についてみると、またその中が三つになつてゐる。

その第一に「正合」(比喩の一つ一つについてその中身の一つ一つ示すこと)である。

第二に是の如く大宝を得たる衆生は皆正法を撰受する善男子・善女人の云々とある箇所は、正法を撰受する人を讃歎する箇所である。

第三に、比喩として挙げた「大宝蔵」はすなはちこれ「撰受正法」である、と言つて「即」の意味を説明した箇所である。

右の第一の「正合」の中がまた二つになつてゐる。

その第一に、「能蓋蔵」(つみため蔵する側としての撰受正法の人)の比喩の中身を説明し、

第二に、「所蓋蔵」(つみためられ蔵せられるものとしての五乗の人)の中身を説明する。

「正法を撰受する善男子・善女人は大地を建立して衆生の四種の最上の大宝を得る」といふ文中の衆生の四種の最(上)の大宝を得るといふ句について、解釈が四種類ある。

第一に、かう解釈する。すなはち「五乗の人の善は、五乗の人の行ひであるから、言葉の意味から言つて、五乗の衆生に属してゐることになる。八地の大士は、この五乗の人の善をすべて自分の心の中に同意して心に収めてゐる。そこで、八地の大士は五乗の衆生を救ひとる宝を得てゐる、と言ふのである。

第二には、かう云ふ。八地以上の大士は、菩薩・縁覚・声聞・人・天の五乗の衆生を教へ化するところの四種類の教の宝を得てゐる。それ故衆生の宝を得る、と云ふのである。

第三には、かう云ふ。撰受正法は衆生を教へ化することによつて前記四種類の宝を得ることができるのである。そこで衆生の宝を得る、と言ふのである。

第四には、かう解釈する。前記四種類の衆生の善根は、それぞれ皆八地の境位にある菩薩によつて、得ることができたのである。それ故に、衆生の宝を得る、と云ふのである。

ところが、右の第一の解釈と第二の解釈とは、ただ「本」(大士の衆生を教化することを「宝」とするか、「末」(衆生の善根)を「宝」とするかで、二つの解釈に違ひがあるが(結局二つとも「宝」は大士の心に収められることとなるから)、大体の意味は同じやうなものである。第三の解釈と第四の解釈とは、「宝」を得る側が「上」すなはち「撰受正法」であるか、「下」すなはち衆生の善根であるか、といふ点が違つてゐる。したがつて第三と第四の解釈は同じではない。また第四の解釈は、「正法を撰受する大士が衆生のための四種類の最上の大宝を得るといふのであるから」文意の解釈としては、通りやすい。しかし、ここでは、(これは「能蓋蔵」の大士の働きの譬になつてしまつて)、「所蓋蔵」すなはち五乗の衆生が得る宝が何であるかを譬へたことにはならない。しかし、後に出てくる結文(「大宝蔵とは即ち撰受正法なり」といふ文)に照らして考へてみると、「能蓋蔵」の譬となつたとしても)、文意は通ることとなる。第三の解釈は、良い解釈であることはその通りであるが、「撰受正法は衆生を教化するから教の宝を得る」といふので、「宝」が何に当るのかはつきりしないために、比喩の立て方が間接的になつて、解釈しにくい。第一と第二とは、各自の念ふところに従つて用ひればよい。

ところで、四種類の宝の中では、ただ無む無む上じやうのほだけが一番上のはずである。どうして、上・中・下の三つのほが皆最上と云ふことができるかといふと、勝つてゐるものは劣つてゐるものを兼ねることができるので、無む無む上じやう、中ちゆう無む、下げ無むの四つのほを通じて「最上」と称するのである。またある説ではかう云ふ——無む無む以外の三つのほは、それぞれの上のほに通じてゆくから、それ故全部を合はせて「最上」と称するのである。

何等をか四と為すより以下は、「正比」の中の二つの部分のあとの部分で、「所蒞蔵の法」（八地以上の大士によつてつみためられ蔵せられる五乗の法）を比喻に合はせる箇所である。

無聞むもんから以下は前の「下価げげ」に該当する。声聞しょうもんから以下は前の「中価」に該当する。縁覚から以下は、前の「上価」に該当する。大乘より以下は前の「無価」に該当する。

是の如く（大宝を得たる衆生は皆云々）より以下は、合比の中の第二の箇所（前の「讚歎さんたん」としたところであるが）、四種の大宝の一つ一つでなく、すべてを合はせて、比喻と喩へたものと合はせたところである。

世尊から以下は、合比の中の第三の箇所、「大宝蔵とは即ちこれ撰受正法なり」といふ相即を説明したところである。ところが、前にある「重担の譬」では、合比の結論として、「是を正法を撰受する善男子・善女人、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能なりと名づく」と述べ、「大地の四重担を持するが如し」の意味内容をまとめてゐるが、しかし、それが撰受正法そのものであるとは述べられてゐない。今この「宝蔵の譬」では、最後に「大宝蔵とは即ちこれ撰受正法なり」と相即の義は述べてゐるが、合比の結論は述べられてゐない。その理由は次のやうに考へられる。すなはち、前の「重担の譬」は重い荷物を身体で背負ふのであるから、仕事そのものがたやすいことではない。しかし、これを背負ふのは他でもなく、撰受正法の人自身がなさることであるから、その重担すなはち撰受正法であることは、大士のすることとして信ずることができる。だから合比の結論を述べるだけにして、相即の説明をしなかつたのである。これに対して「宝蔵の譬」は、たとへて「宝がある」と言つただから、その宝が撰受正法そのものであることは説明しなければわからない。しかし、身体で背負ふといふのではないから、行為としてみればやさしいことであると思はれる。だから、相即の説明はしてゐるが、合比の結論は述べなかつたのである。且つまた、

前の「重担の譬」では、合比のはじめのところ既に「彼の大地を踰えたり」と、比喻にとつた大地以上であると言つてゐる。いまこの「宝蔵の譬」では、ただ「衆生の（四種の最上の大）宝を得る」と言つて、「踰えてゐる」とは言つてゐない。これもまた、相即を説明する必要がある意味と同じなのである。

(研究)

『義疏』のこの箇所を『敦煌本』と比較してみますと、分科（段落のたて方）と、合比（比喻と比喻の対象となつた事物の対応関係を明らかにすること）とは、全く同じと見てよいでせう。

しかし、『義疏』の「衆生の四種の最（上）の大宝を得るとは、解するに四種あり」以下の、四種類の解釈を挙げても即を明さず、今此の宝蔵の譬には即すれども結せざるは、云々」とあるところ以下、「重担の譬」には「結」があつて「即」が無く、「宝蔵の譬」には「即」があつて「結」が無い。この点を注意して、そこに問題を求め、どうしてさうなるのかを説明した箇所もまた『敦煌本』には見られません。

この『敦煌本』に見られない箇所は、經典原文の文章に即した精細な検討の述べられてゐる箇所であり、『義疏』の特徴はかういふところにあると思はれます。この箇所に四種類の解釈を挙げて、その適否を細かに検討したり、「結」と「即」との有無を文脈をたどつて追究したりして、その間に常に大士を心に浮べて結論を求めて行かうとする態度は、ただ一人の天才の書齋の中の仕事といふよりも、『義疏』の成るに當つては、その背後に『經典』に対する共同研究（輪読）のやうなものあつたことが予想されるのであります。